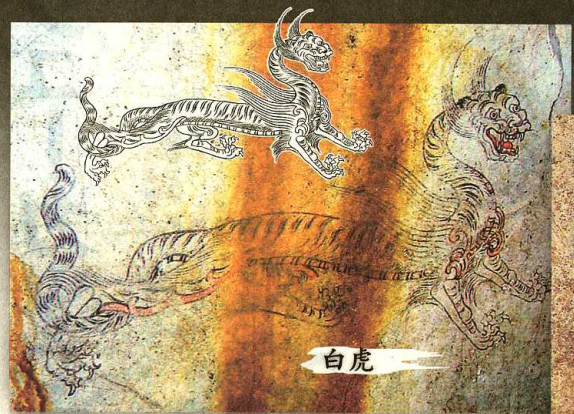


キトラ古墳壁画特別公開

四神降臨

15日から奈良・飛鳥資料館

蘇る至宝たち



白虎



玄武



青竜

朱雀

古代屈指の芸術作品が初めて一堂にそろう。15日から奈良県明日香村の奈良文化財研究所飛鳥資料館で開幕するキトラ古墳・四神壁画の特別公開。吉兆をもたらす神鳥とされた「朱雀」を含め、被葬者を守り続けた四つの神獣が、1300年前に創出された美の世界を蘇らせる。



キトラ古墳と四神図
7世紀末～8世紀初頭に築かれた円墳で、国の特別史跡。1983年、石室内に描かれた四神図のうち「玄武」が発見され、98年に「青竜」と「白虎」、2001年に朱雀が確認された。ほかに十二支や星宿図も見つかったが、劣化が激しく、大部分がはぎ取られて順次、公開されている。

四神の写真はいずれもはぎ取り前。保存修理で乾燥させた写真は、水分で色に深みが出る「濡め」の色が残り、色が薄く見える。復元図は来村多史史・阪南大教授提供
グラフィック：栗田聖実 / The Asahi Shimbun

高松塚との関連は ■ 保存・修復 広く発信を

「キトラ」壁面をどう考えるか。鈴木氏は「中国の前漢や朝鮮半島の高句麗、百済に由来する壁面には東アジアの文化が凝縮されている」と指摘。百橋氏は「キトラ、高松塚古墳の四神の違いを解説しながら、奈良時代の正倉院文書にある鏡の下絵では、白虎の「二神」になっていることに触れ、「四神の考え方が理解されていないかもしれない」と問題提起した。西岡氏は「こんな素晴らしい壁面があるとは知らなかった。本物を見た」。河合氏も「キトラほどの教養が手かかっていた。日本に二つしかない四神壁画は、どちらが先に描かれたのかについて、百橋氏は「キトラの十二支は新しい画題で、四神の向きが循環しているのも中国にはない。高松塚の方が古い伝統を引いている」と主張。鈴木氏はこれに反論し、「キトラの方が基本的な構図が多く、高松塚は変化している」と唱えた。沢田氏は「例えば白虎と青竜は二つの原因で、向きを変えている」として、向きを変えて描かれている。そうした描画技術の分析が手がかりになるとの考えを示した。議論は四神が「つかみつかっていない理由」も及び、百橋氏は火葬の可能性が高い天武・持統合葬陵が近接していることから、「壁面が描かれた墓室を必要とした最後の時代だった」と目説を展開。「高松塚の女性の服装は当時の日本のもの。大體土師の壁面を日本風に改めた」と語り、鈴木氏も「様々なルートで入ってきたものの中から選択して採り入れた」と主張した。

特別講演・現状報告



河合敦さん 西岡麻生さん 百橋明穂さん 鈴木靖民さん 沢田正昭さん 相原嘉之さん 青柳正規さん

特別講演では、青柳正規・国立西洋美術館が「文化財の保存と公開」と題して文化財を取り巻く現状について説明。「有形文化財は豊富な情報を持っている。過去をただでなく、将来を予測するきっかけとなる価値を持つ」と指摘し、文化財の保存・保護に向けた社会的認知の確立が求められると訴えた。続いて、相原嘉之・明日香村教委調整官がキトラ壁面のはぎ取り・修復についての状況を報告した。

文化財の保存をどうやって行うか。百橋氏は「壁面はき取りに日本古来の表装技術が役立つことを紹介しながら、その成果を世界に発信していく」必要性を強調。「国際壁面修復研究センター」の設置を提案した。河合氏は「文化財を大事にしよう」というのは、公開のために関係者は知恵を絞ってほしい」と求め、西岡氏も「キトラ壁面を全国で見られる機会があれば、大変だ」と述べ、百橋氏は「壁面が「一分離された」ということで、「遺跡と壁面をどうやって共存させるか」が難しい」と指摘。将来を見据えた活用策の構築を訴えた。沢田氏は「展示される壁面は、あくまで部分的な表装。石室の空間を想像して絵の位置づけを考へてほしい」と述べ、文化遺産のあり方について議論を深める必要性を強調した。

◆シンポジウムの詳細はアサヒ・コム (<http://www.asahi.com/kansai/>) で紹介しています。

開催案内

◆日時＝5月15日(土)～6月13日(日)の午前9時～午後6時(土曜は午後9時まで、5月31日のみ休館)
◆場所＝奈良県明日香村奥山の奈良文化財研究所飛鳥資料館
◆料金＝大人500円、高大生300円、中学生以下無料

キトラの謎と出会う

今回、特別公開される神獣たちは誰を守護したのか、被葬者をめぐる議論が長年、研究者の間で続けられてきた。石室内で見つかった人骨を鑑定した結果、40～60代の男性とする見方が有力になり、候補は30人ほどに絞られた。多くの支持を集めるのが皇子。キトラ古墳がある明日香村檜隈段には、飛鳥系人骨の壁面が知られる高松塚古墳や天武・持統合葬陵があり、天武天皇が東南の直線上に古墳が並ぶ「聖なるライン」の一角を占めることから、天武天皇の皇子の一人とする説が浮上った。猪熊兼勝・京都府大名誉教授は「王の乱(672年)に功績があった高市皇子を最有力候補と挙げる。これは異論もある。天武・持統合葬陵には壁面がなく、皇子の墓を壁面が飾る比較的狭小な一帯が「阿部山」と呼ばれてきたことから石大臣を務めた阿倍御主人を葬ったとみる説もある。四神が大陸由来であることを重視した渡来人も根強い。千田裕・奈良県立図書館長は「朝鮮半島の動乱で日本に亡命してきた百済の王族、中で50歳前後で死去した昌成の可能性が高い」と上した。猪熊兼勝・京都府大名誉教授は「王族以外に、渡来系一族の東漢氏を推す意見もある」。

被葬者と並んで現代人の想像をかき立てるのが壁面の作者だ。動的で精緻なデザインから、唐や高句麗で最新の絵画技法を学んだ絵師の存在がクロズアッパツされている。百橋明穂・神戸大教授が本命とするのが、遣唐使氏族の遺文連本実・遣唐使連氏の子。天武天皇に水平を測る器具を献上した、有徳絵師集団を率いたとされ、彼の指押で日本に亡命したと推定された。だが、本実が描いた絵面は確認されておらず、推定は城を出ない。キトラの朱雀と同じスタイルが大陸にないことなどから、別の日本絵師の作とする見方も出ている。

※問い合わせ＝キトラりんりんダイヤル(050・7105・5355) 主催)文化庁、同資料館(共催)奈良県、同県教委、明日香村、同村教委(後援)朝日新聞社、平城遷都1300年記念事業協会